

横市地区遺跡群

馬渡遺跡（第2次調査）・坂元A遺跡

県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う遺跡の発掘調査概要報告書



2001年3月31日
宮崎県都城市教育委員会

表紙写真：坂元A遺跡最下層水田跡

序 文

本書は、「県営扱い手育成基盤整備事業横市地区」に伴い、受託事業として都城市教育委員会が発掘調査を実施した横市地区遺跡群の概要報告書であります。

都城市的横市地区では県営扱い手育成基盤整備事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が平成8年度から継続的に実施されており、これまでにも数々の成果が報告されております。

今年度の調査では、平安時代の居宅跡の見つかった馬渡遺跡をはじめ、国内最古級の绳文時代晩期後半の水田跡が検出された坂元A遺跡など、多くの貴重な調査成果が得られました。その一端については、新聞やテレビすでにご周知のことと存じます。

本書の刊行によって、こうした地域の文化財に対する理解と認識がますます深くなつていくことを願うとともに、今回の成果が学術研究の発展に少しでも寄与できれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査に従事していただいた市民の皆様をはじめ、関係各機関の方々には多大なご理解ご協力をいただきました。心から感謝の意を表します。

2001年3月

都城市教育委員会
教育長 長友久男

例　　言

1. 本書は、「県営担い手育成基盤整備事業横市地区」に伴い都城市教育委員会が平成 12 年度に実施した（ただし、馬渡遺跡については平成 11 年度からの継続事業）横市地区遺跡群の発掘調査概要報告書である。
2. 平成 12 年度の発掘調査地は、宮崎県都城市蓑原町の馬渡遺跡・江内谷遺跡と同市南横市町の坂元 A 遺跡・坂元 B 遺跡の合計 4ヶ所の遺跡であるが、江内谷遺跡と坂元 B 遺跡は平成 13 年 3 月前半の段階において調査未完了であるため、本書には、馬渡遺跡（第 2 次調査）と坂元 A 遺跡の概要を掲載している。
3. 現場における遺構の実測は、作業員の協力を得て桑畠・原田・外山が行い、同市文化課の矢部喜多夫の協力を得た。遺構実測図の製図は、桑畠と原田が行った。
3. 本書に掲載した遺物の実測は、整理作業員の協力を得て、桑畠・原田が行い、製図は桑畠があたった。
5. 本書で使用した基準方位は磁北であり、レベルは海拔絶対高である。
6. 遺構の写真撮影は桑畠・原田・外山が行い、遺物の写真撮影は矢部の協力を得た。また、遺構の空撮および写真図化は九州航空株式会社に委託した。
7. 植物珪酸体分析等の自然科学分析については(株)古環境研究所に委託し、木製品の保存処理は吉田生物研究所に委託した。
8. 本書の執筆は桑畠と原田が共同して行い。編集は桑畠があたった。
9. 発掘調査および概要報告書作成にあたっては下記の方々よりご助言・ご協力をいただいた。

工楽普通（ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所）、西中川駿（鹿児島大学）、木村幾多郎（大分市歴史資料館）、柳沢一男（宮崎大学）、山田昌久（東京都立大学）、田崎博之（愛媛大学）、西健一郎（九州大学）、山崎純男・山口譲治・大庭康時・池田祐二（福岡市教育委員会）、松永幸男（北九州市立考古博物館）、佐藤甲二（宮城県仙台市教育委員会）、石井克己（群馬県子持村教育委員会）、上村俊雄・中園聰（鹿児島国際大学）、木本雅康（長崎外国语大学）、永山修一（ラ・サール学園）、吉村和昭（奈良県立橿原考古学研究所）、柴田博子（宮崎産業経営大学）、池畠耕一（鹿児島県文化課）、前追亮一・東和幸・川口雅之（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、菅付和樹・福田泰典（宮崎県埋蔵文化財センター）、日高孝治（宮崎県北西諸県福祉事務所）、大盛祐子
10. 発掘調査で出土した遺物とすべての記録（写真・図面など）は都城市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 序 説	1) 調査の経緯と経過.....	1
	2) 調査組織.....	1
第2章 遺跡の位置と環境.....		2
第3章 馬渡遺跡（第2次）の調査	1) 遺跡の立地と調査の概要.....	3
	2) 縄文時代～古墳時代.....	5
	3) 平安時代.....	5
	4) 中世.....	8
第4章 坂元A遺跡の調査	1) 遺跡の立地と調査の概要.....	10
	2) 縄文時代晚期後半.....	14
	3) 弥生時代前期後半.....	16
	4) 弥生時代中期後半.....	16
	5) 弥生時代後期末.....	17
	6) 中世.....	21
第5章 ま と め	1) 馬渡遺跡について.....	24
	2) 坂元A遺跡について.....	24

挿 図 目 次

図1-1 九州全図.....	2
図1-2 遺跡分布図.....	2
図2 遺跡位置図.....	3
図3 周辺地形および調査区域図.....	4
図4 1・2次調査の遺構全体図.....	5
図5 2次調査遺構分布図.....	6
図6 土層柱状模式図.....	10
図7 周辺地形および調査区域図.....	10
図8-1 G-10区の上層断面図.....	11
図8-2 G-7区の土層断面図.....	11
図8-3 J-4区の土層断面図.....	11
図9 縄文時代晚期後半の水田跡平面図.....	12
図10 弥生時代前期後半の水田跡平面図.....	15
図11 弥生時代中期後半の水田跡平面図.....	17
図12 組み合わせ式木製品実測図.....	18
図13 弥生時代後期末の水田跡平面図.....	19
図14 中世（鎌倉時代）の水田跡平面図.....	21
図15 中世（桜島文明磐石上面）の水田跡平面図.....	23

写 真 目 次

1 発掘調査風景（西から）	4	29 鐺文時代後期後半の土器と石器	14
2 調査区周囲の排水溝とポンプ	4	30 自然流路完態状況（西から）	16
3 堀波遺跡2次調査全景（東側上空から）	7	31 自然流路断面	16
4 講状遺構12と塙地の接続部分	8	32 弥生時代前期後半の水田跡（西から）	16
5 講状遺構12上層遺物出土状況	8	33 弥生時代前期後半の土器と石包丁	16
6 塙地（西から）	8	34 弥生時代中期後半の水田跡（南西から）	18
7 木製品（柄）出土状況	8	35 弥生時代中期後半の甃跡断面	18
8 塙地内木製品（皿）出土状況	8	36 板状木製品（田下瓢？）出土状況	18
9 塙地内越州窯系青磁出土状況	8	37 組み合わせ式木製品出土状況	18
10 堀立柱建物跡2（南から）	9	38 組み合わせ式木製品	18
11 堀立柱建物跡2の柱穴断面割り状況	9	39 同上着柄部と刃部の拡大	18
12 豊穴状遺構3（東から）	9	40 弥生時代後期末水田跡（南東から）	20
13 緑釉陶器出土状況	9	41 弥生時代後期末水田跡（南から）	20
14 右鉢（丸鉢）出土状況	9	42 弥生時代後期末水田跡（東区北側）	20
15 土師器（甕・壺・瓶）	9	43 同左	20
16 須恵器（壺・瓶・壺）	9	44 弥生時代後期末の畦畔断面	20
17 墨書き器（「永」・「財」・「長」）	9	45 平づくね土器出土状況	20
18 越州窯系青磁・緑釉陶器・灰釉陶器・石鉢	9	46 中世（鎌倉時代）水田跡（南から）	22
19 G-10区の土層	11	47 中世土師器出土状況	22
20 G-7区の土層	11	48 牛の足跡検出状況	22
21 J-4区の土層	11	49 牛の足跡	22
22 鐺文時代後半水田跡上面検出状況	13	50 桜島文明縞石上面の水田区画検出状況	22
23 鐺文時代後半水田跡（東上から）	13	51 桜島文明縞石の断面	22
24 9c層を除去した状態	14	52 桜島文明縞石除去後の状態（西区）	23
25 鐺文時代後半水田跡近景	14	53 桜島文明縞石除去後の状態（東区）	23
26 鐺文時代後半の畦畔断面	14	54 水田区画の断面	23
27 鐺文時代後半の畦畔	14	55 桜島文明縞石直下の状況	23
28 刻目突起文土器出土状況	14	(平坦な部分と凸が著しい部分)	

第1章 序 説

1) 調査の経緯と経過

宮崎県都城市横市地区では、平成 5 年度に県営ほ場整備事業（平成 9 年度より県営扱い手育成基盤整備事業に移行）の実施が採択された。平成 6 年度、宮崎県北諸県農林振興局から文化財の所在の有無について照会を受けた宮崎県文化課が一帯の分布調査を実施したところ、事業対象区域約 170 ヘクタール内において 10 遺跡、約 44 ヘクタールにおよぶ埋蔵文化財包蔵地の所在が推定された。その後、都城市教育委員会は宮崎県文化課が実施した試掘調査の結果を受けて、北諸県農林振興局と協議を行い、平成 8 年度から鶴喰遺跡の調査を皮切りとして、緊急の発掘調査を実施している。平成 12 年度は、平成 11 年度に第 1 次調査を実施した馬渡遺跡の南西側区域において、第 2 次調査を行なった。さらに、同年度にその東側一帯を含めた約 9 ヘクタールのは場整備事業が計画されていたため、その範囲内についても、平成 11 年の宮崎県教育委員会による確認調査の際に把握されていた遺跡の範囲と工事計画とを照らし合わせた結果、西から、江内谷遺跡・坂元 A 遺跡・坂元 B 遺跡の一部に影響があることが判明した。そこで、切土および道路・排水路部分については、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。平成 11 年度までに発掘調査した遺跡と平成 12 年度に調査した遺跡は以下の一覧表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査面積	調査年度	主な時代と成果
鶴喰遺跡	都城市横市町	8100 m ²	平成 8・9 年度	古墳時代の集落跡・中世の館と水田跡
肱穴遺跡	都城市横市町	15000 m ²	平成 10 年度	縄文時代～近世の集落跡と水田跡
今房遺跡	都城市横市町	3110 m ²	平成 11 年度	弥生時代の集落跡・中世の水田跡
馬渡遺跡	都城市義原町	9900 m ²	平成 11・12 年度	弥生時代の集落跡・平安時代の居宅跡
坂元 A 遺跡	都城市南横市町	2800 m ²	平成 12 年度	縄文時代～近世の水田跡
坂元 B 遺跡	都城市南横市町	6300 m ²	平成 12 年度	縄文時代～近世の集落跡・中世の墓跡
江内谷遺跡	都城市義原町	3100 m ²	平成 12 年度	平安時代の集落跡・水田跡

平成 12 年度調査分のうち江内谷遺跡と坂元 B 遺跡については現在、調査中であるため、本書にはすでに現場における調査の終了した馬渡遺跡（第 2 次調査）と坂元 A 遺跡についてその概要を紹介する。なお、馬渡遺跡と坂元 A 遺跡については、平成 12 年 12 月 2 日に一般市民対象の遺跡見学会を実施した（参加者約 200 名）。

2) 調査組織

- ・調査主体者 宮崎県都城市教育委員会
- ・調査責任者 教育長 長友久男
- ・調査事務局 文化課長 内村一夫
 - 文化課課長補佐 盛満和男
 - 文化財係長 堀之内克夫
- ・調査担当者 文化課文化財係主査 桑畠光博
 - 文化課文化財係嘱託 下田代清海・原田亜紀子・外山隆之
- ・調査指導者 小田富士雄（福岡大学）、宍戸章（宍戸地質研究所）、高橋祐二（宮崎県東臼杵郡教育事務所）、坂井秀弥（文化庁）、石川悦雄・谷口武範（宮崎県教育委員会文化課）

第2章 遺跡の位置と環境

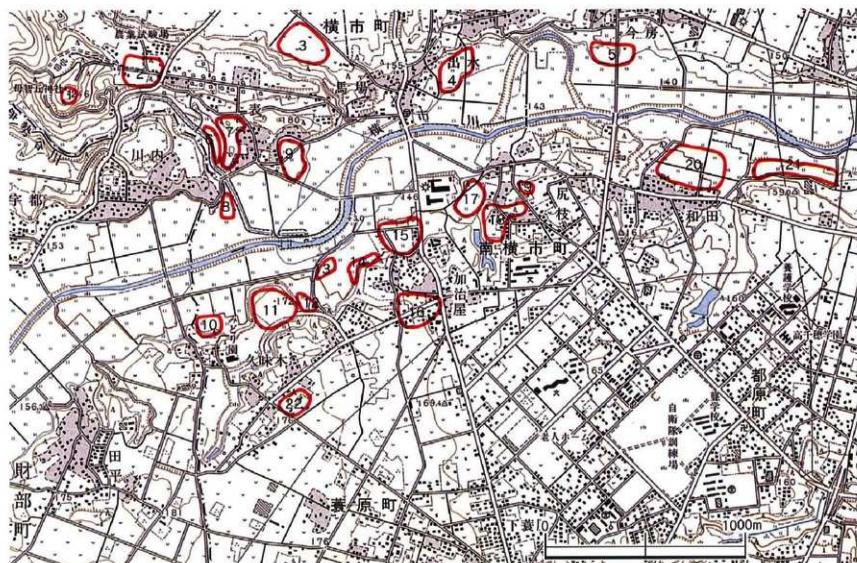
都城市は宮崎県の南西部に位置しており、都城盆地のほぼ中央部を占める。この盆地は九州の東南部にあり、南北約 25 km、東西約 15 km の楕円状をなしており、北西に霧島火山群を仰ぎ、西側を瓶台山や白鹿山などの山地に、東から南を鰐塚山・柳岳を主峰とする山地に囲まれ、西南方のみがわずかに開かれた地勢を呈する。また、盆地中央部を大淀川が貫流しており、多くの支流を集めて、南から北へと流れる。その大淀川を挟んで、東側の山地は比較的急峻で、起伏が大きく、その裾部には緩やかに盆地底へと傾斜する広大な扇状地が発達している。一方、北西に位置する山地は霧島火山の山麓にあたり、比較的緩やかなスロープとなる。その周縁から南にかけてはおおむね平坦で起伏の少ないシラス台地が広がっているが、西から東へと流れる大淀川の支流（北から丸谷川、庄内川、横市川）がその台地を分断しながら流れしており、それぞれの流域には氾濫原と河岸段丘の形成が認められる。横市川は鹿児島県財部町から、蛇行しながら都城盆地中央部へ向けて流れ、大淀川に合流する。

横市地区遺跡群は、その横市川の両岸に所在する遺跡群を総称している。

平成 8 年度からの調査で、縄文時代から近世にかけての幅広い時期の遺跡が確認されているが、その多くは、従来市内では調査対象となることが少なかった低湿地の遺跡であり、これまでに得ることのできなかったが貴重なデータが次々と提出されている。



図1-1 九州全図



- | | | | | | | |
|--------------|----------------|----------|------------|---------|---------|---------|
| 1: 母曾丘原第1 | 2: 母曾丘原第2 | 3: 牧の原第2 | 4: 脇穴 | 5: 今房 | 6: 煙田 | 7: 新宮城跡 |
| 8: 母曾丘谷 | 9: 鶴喰 | 10: 馬渡 | 11: 中尾山 馬渡 | 12: 江内谷 | 13: 坂元A | 14: 坂元B |
| 15: 加治屋 (3次) | 16: 加治屋 (1-2次) | 17: 星原 | 18: 田谷・尻枝 | 19: 胡摩段 | | |
| 20: 平田 | 21: 早馬 | 22: 池原 | | | | |

図1-2 遺跡分布図

第3章 馬渡遺跡の調査

1) 遺跡の立地と調査の概要

シラス台地の北側眼下、横市川の氾濫原に面した沖積段丘（微高地）上に立地する。現況は水田地帯であり、北側に向かって標高を減じながら段々に下がっている。ここでは段丘という表現を用いたが、実際に表土を剥ぐと、微地形はより複雑であり、霧島御池軽石層（約4200年前）が安定して堆積している部分と同軽石層が急激に傾斜して谷状地形となっている部分が複雑に入り組んでいることが判明した。

調査期間は、第1次調査が平成11年11月25日から平成12年3月31日まで、第2次調査が、平成12年4月18日から平成12年12月29日まで行った。以下、第2次調査に関してその概要を述べる。

なお、第2次調査は調査期間の大半を通じて、南側後背のシラス台地裾部から涌き出る湧水と梅雨時期から夏にかけての降雨によって、調査区域内に恒常的に水が溜まる状態が続いたため、調査区外周には小規模な排水溝を設け、その終末には溜め枡を掘ってそこにポンプを導入して、水を汲み上げながら調査に

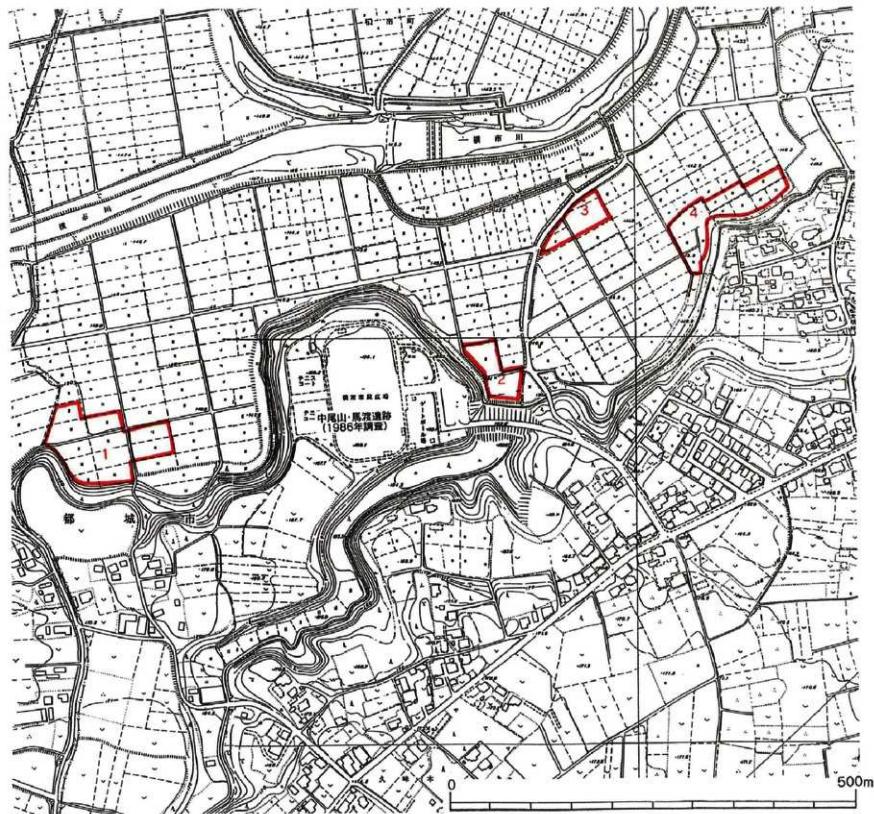
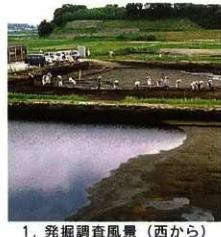


図2 遺跡位置図

あたった。しかし、長雨のときには排水に数日を要することもあり、調査は難航を極めた。そこで、周囲の水田の稻刈が終わった後（平成 12 年 11 月中旬）、調査区北側に大規模な仮排水溝を掘削した。これによって當時排水することができとなり、遺構の検出と掘り下げ、そして実測までスムーズに進行することができるようになった。第 2 次調査では、平安時代（9 世紀代）を中心とした遺物が質・量ともにかなり高い密度で検出されたが、第 1 次調査（A・B 地区）の結果とをあわせて検討した結果、北側を段丘端部に、南側と東側を自然地形の窪地で分断され、西側のみを人工的な溝状遺構によって区画された平面プランはやくずれた五角形の南北約 70m・東西約 80m の居宅跡であることが判明した。E・F-6・7 区（居宅跡のはば中心）に位置する掘立柱建物跡（掘立柱建物 2）は四面庇をもつ比較的大型の建物跡であり、居宅の中心的建物と推定される。遺物は、南側の窪地へ向かう傾斜面と窪地の中から墨書き器（「永」・「財」など）・土師



1. 発掘調査風景（西から）



2. 調査区周囲の排水溝とポンプ



図3 周辺地形および調査区域図

器・黒色土器・須恵器・木製品（柄曲物・椀・櫛・弓など）が多量に出土している。さらに注目される遺物として、石鈎（丸柄）や越州窯系青磁・緑釉陶器・灰釉陶器なども出土している。

2) 縄文時代～古墳時代

C 地区東側（F-9 区）の包含層中から縄文時代晩期中頃の深鉢形土器片が少量出土している。

弥生時代に関しては、第1次調査の B 地区で竪穴住居跡（竪穴状遺構 1）が検出されていたが、第2次調査では弥生時代後期後半の土器片が少量出土しているのみであり、集落跡の広がりが想定できるような具体的な遺構は確認できなかった。

また、古墳時代の甕の底部片が溝状遺構 12 の最下層から出土しており、周囲の包含層中からも刻目突帯文をもつこの時代の甕の破片が出土しているものの、明確な住居跡等は検出されていない。

3) 平安時代

今回の調査区は先述した居宅跡の南半部にあたる。居宅跡の平坦面から南に向かって緩やかに傾斜した場所（H-8 区など）、後述する窪地に面したところでは、掘立建物跡などの遺構の密度が粗となる一方で、土師器・須恵器などの出土遺物の分布密度は高くなり、数点ずつではあるが、越州窯系青磁・緑釉陶器・灰釉陶器も出土している。その他、緑色がかかった白色を呈する石材を加工した石鈎（丸柄）の欠損品も 1

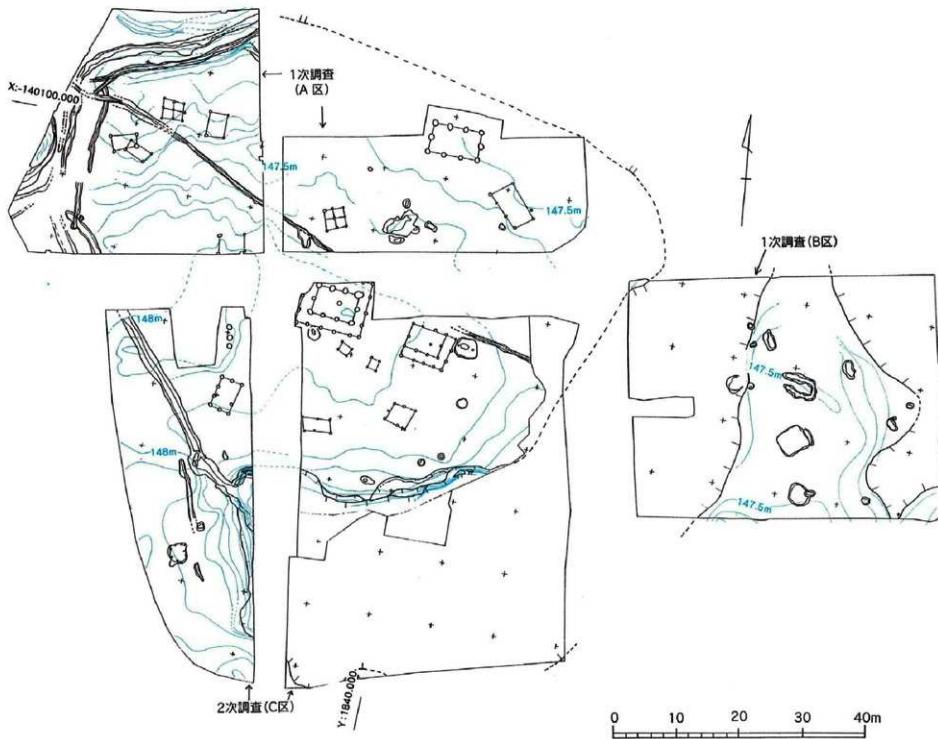
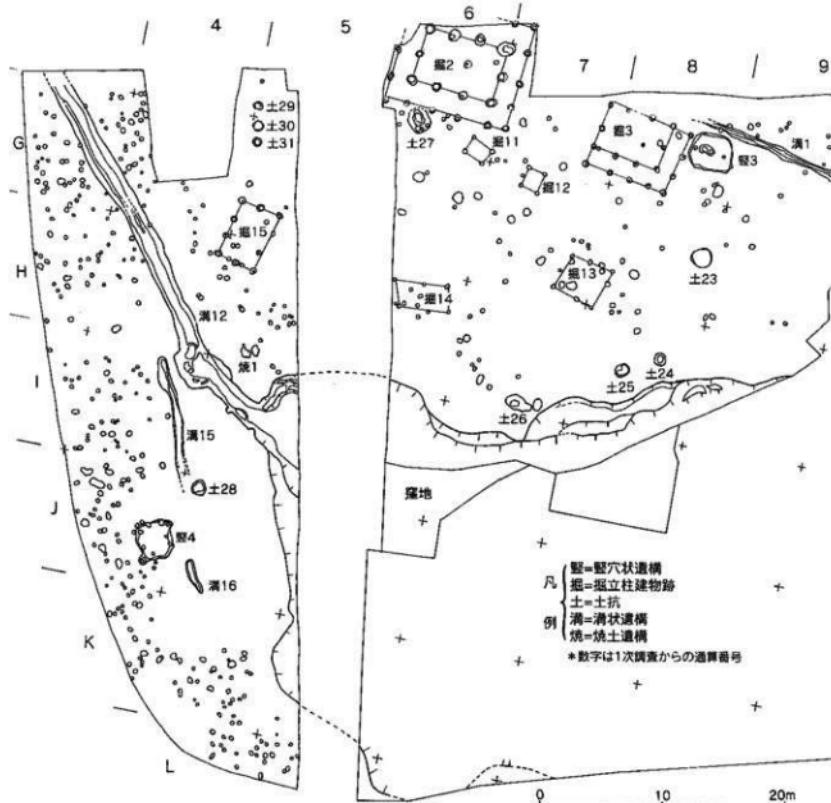


図4 1・2次調査の遺溝全体図

点見かっている。そこからさらに南へは、遺構検出面とした霧島御池軽石層が急傾斜しており、自然地形の窪地が形成されている。その窪地は第1次調査のB地区へ延びているものと考えられる。窪地内には分解されていない植物の葉片（ヨシ属と思われる）を多量に含む黒色の泥炭質土壌が厚く堆積している。さらに、その土壌の上層からは土師器・須恵器をはじめ、墨書き土器や木製品（曲物・皿）などが出土している。墨書き土器には完形品も含まれており、坏や椀の体部に一文字ずつ記されている。また、判読できる文字には「永」が多く見受けられる。なんらかの祭祀に伴って、この窪地に投棄されたものとみられる。

溝状遺構12は南東一北西に走行し、第1次調査A地区西側に延びており、そこでやや西よりに走行を変えながら立ち上がるようである。断面形状は逆台形状で、幅約1.5m、深さ約50cmである。一方、南東端（I-5区）では窪地と接続しており、断面観察の結果、両者に切り合い関係は認められず^a、同時期である



と判断された。窪地との接続部分とその周辺では、溝状遺構内堆積土の上部から、土師器・須恵器などの遺物が多量に出土している。接続部分の窪地北側法面は階段状を呈しており、人工的な整形が加えられているものと考えられる。また、その窪地の底には軽石混じりの砂層が堆積しており、柄・丸木弓・曲物の破片などの木製品をはじめ、多量の樹木の幹・枝・葉・種実にまじって、昆虫の羽なども少量認められた。

そこから、掘立柱建物跡は合計 7 棟を確認した。掘立柱建物跡 2 は、先述したように居宅跡の中心的な建物跡である。身舎の規模は梁間 2 間（約 4.5m）、桁行 3 間（約 6.8m）で、四面に庇が付く。庇と身舎の間隔は約 2 m である。身舎柱穴の掘形はほぼ円形であり、直径は 70~90 cm で、深さは 75~30cm である。断面を観察すると、建替えの痕跡の認められるものがある。庇の柱穴の掘形もほぼ円形であり、直径は 50~30cm で、深さは 30~15cm である。身舎だけの規模でみると、第 1 次調査 A 地区東側で検出された掘立柱建物跡 1（梁間 2 間・約 4.7m × 桁行 3 間・約 7.7m）よりも小さいが、庇の部分を合わせると居宅内で最大規模の建物となる。掘立柱建物跡 3 は、掘立柱建物跡 2 とは主軸方向が若干ずれており、時期差があるものと想定される。身舎の規模は、梁間 2 間（約 5.5m）、桁行 3 間（約 3.7m）で、南側と東側の 2 面に庇が付く。柱穴の掘形はほぼ円形であるが、一部不整形なものも認められた。身舎柱穴の直径は 45~35cm、深さは 45~15cm であり、庇柱穴の直径は 45~35cm、深さは 45~20cm である。一ヶ所の柱穴埋土からは墨書き器が出土した。竪穴状遺構は 2 基ある。竪穴状遺構 3 は東西約 3.5m・南北約 3.0m の隅丸方形プランで、深さは約 15cm である。床面中央からやや西よりに長方形プラン（1.2×0.6m）の土坑を伴っており、その中には灰・炭化物が堆積していた。柱穴は西側と東側に 1 本ずつの 2 本主柱である。床面近くから土師器甕の破片が出土している。竪穴状遺構 4 は南北約 3 m・東西約 2.7m のいびつな方形プランで、深さは約 25cm である。南北コーナーに出入口と思われる張り出しがある。柱穴は周壁ラインに沿って 8 基を検出したが、やや規則性に欠ける。北側床面に微量の炭化物と灰の分布が認められた。覆土の上部から黒色土器、鉄製品、砥石が出土しているが、床面上からは出土遺物が認められなか



3. 馬渡遺跡 2 次調査全景（東側上空から）

ったため、平安時代よりも古くなる可能性もあるが、詳細な時期については言及できない。土坑は9基を確認した。円形プランのもの（土坑23・24・25・28・29・30・31）と楕円形プランのもの（土坑26・27）がある。このうち、土坑23は直径約1.6m、深さ約15cmであり、床面直上から土師器の甕と壺が検出された。また、直径約1.2m、深さ約60cmを測る土坑28の覆土下層からは、挽物の柵と板状を呈する部材や焼けた木材などが出土した。

4) 中世

溝状遺構3条を確認した。溝状遺構1は、断面形は逆台形を呈し、幅約70cm、深さ30cmで、東一北西方向に走行している。第1次調査A地区において検出されていた溝状遺構につながる。他は、いずれも溝状遺構12の西側にほぼ南北に走行する浅く不明瞭な溝状遺構（溝状遺構15・16）がみられた。

溝状遺構12の西側では、比較的小規模なピット群がかなり高い密度で検出されており、建物跡の存在が想定される。



4. 溝状遺構12と墳地の接続部分



6. 墳地（西から）



5. 溝状遺構12上層遺物出土状況



7. 木製品（柵）出土状況



8. 墳地内木製品（皿）出土状況



9. 墳地内越州窯系青磁出土状況



10. 挖立柱建物跡2（南から）



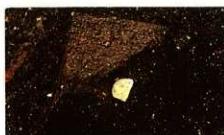
11. 挖立柱建物跡2の柱穴断ち割り状況



12. 壁穴状遺構3（東から）



13. 緑釉陶器出土状況



14. 石鉢（丸鉢）土出状況



15. 挖土師器（甕・壺・壺）



16. 須恵器（甕・瓶・壺）



17. 墨書き土器（「永」・「財」・「長」）



18. 越州窯系青磁・緑釉陶器・石鉢（丸鉢）

第1章 坂元A遺跡の調査

1) 遺跡の立地と調査の概要

坂元A遺跡は、大淀川支流の横市川右岸につくられた沖積段丘の端部に立地し、調査地はシラス台地の裾部から沖積低地へ落ちていく傾斜の変換点にあたる。

現況は大きく3枚の水田区画に分けられており、標高は高いところで約147m、低いところで約146mと北東へ向かって段々に落ちている。ちなみに調査対象区域内においては、霧島御池軽石層（約4200年前）は確認できなかったが、調査区域の南西側に隣接する水田に確認トレンチを入れた結果、南方約10mの地点で同軽石層が北（調査区域側）へ向かって急傾斜していることが判明した。また、その霧島御池軽石は全体に灰白色を呈しており、同軽石層下時には当該地一帯が離水していなかったことがうかがえる（安定した台地

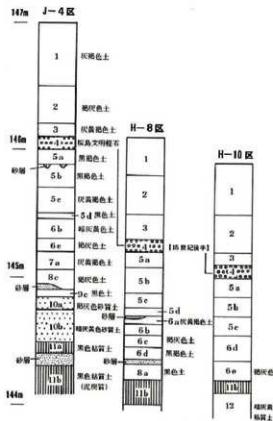


図6 土層柱状模式図

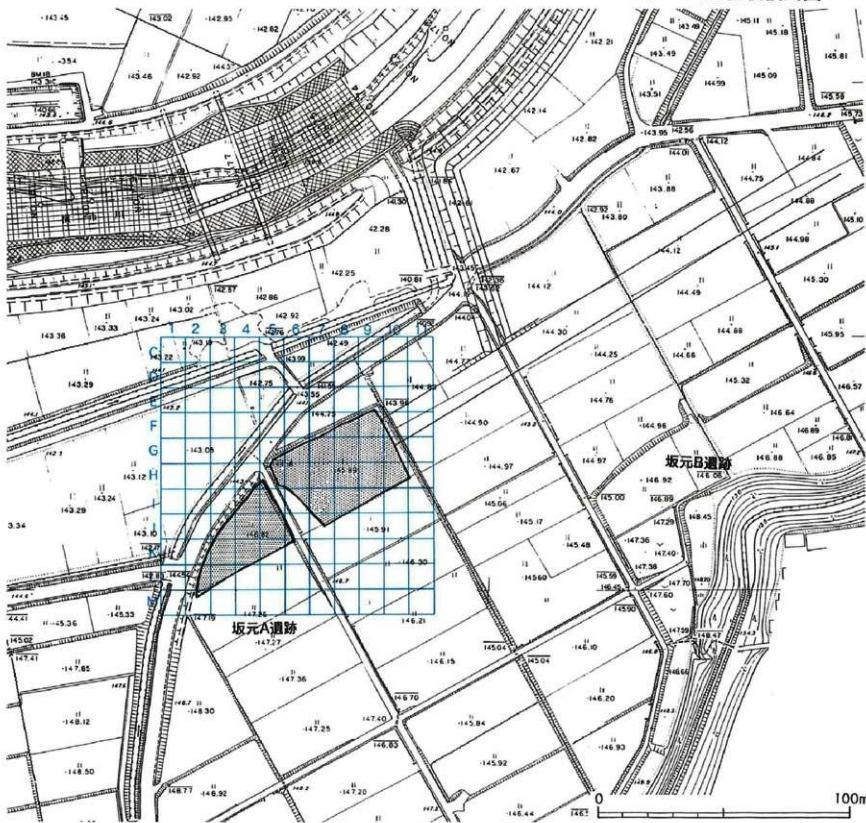


図7 周辺地形および調査区域図

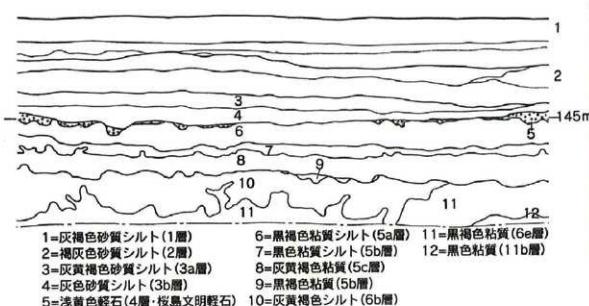


図8-1 G-10区の土層断面図



19. G-10区の土層(北西から)

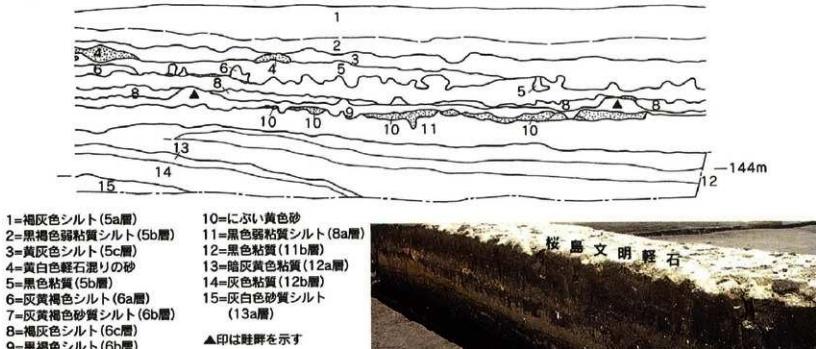


図8-2 G-7区の土層断面図



20. G-7区の土層(南西から)

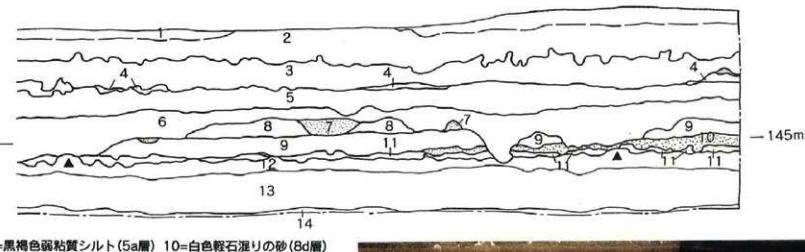


図8-3 J-4区の土層(断面図)



21. J-4区の土層(西から)

・段丘上では同軽石が黄橙色を呈する)。調査期間は平成12年4月3日から平成13年1月31日まで、約2800m²を対象に実施した。また調査対象地は農道によって東側と西側に分断されているが、便宜上、それぞれを東区と西区と呼ぶ。梅雨時期には地下水位が高まり、降雨が続くと調査区内に水が溜まるため、調査区の壁面に沿って溝をめぐらせ、水を調査区外に排水しながら調査を進めた。

調査開始時において調査区域の南壁に沿って設けた深掘トレンチの断面でプランツ・オパールの定性分析と簡易定量分析を実施したところ、各層からイネが検出された。はたして調査の結果、中世(室町時代・鎌倉時代)、弥生時代後半、弥生時代中期後半、繩文晚期後半の水田跡をとらえることができた。なかでも中世と弥生時代後半の水田区画は調査域のほぼ全域で確認することができた。なお、国内最古級となる繩文時代晚期後半の水田跡については、調査終了後、保存状況の良好な遺構面の一部に人力でシラスをかぶせ(30~40cmの厚さ)、部分的に現状保存の措置をとった。

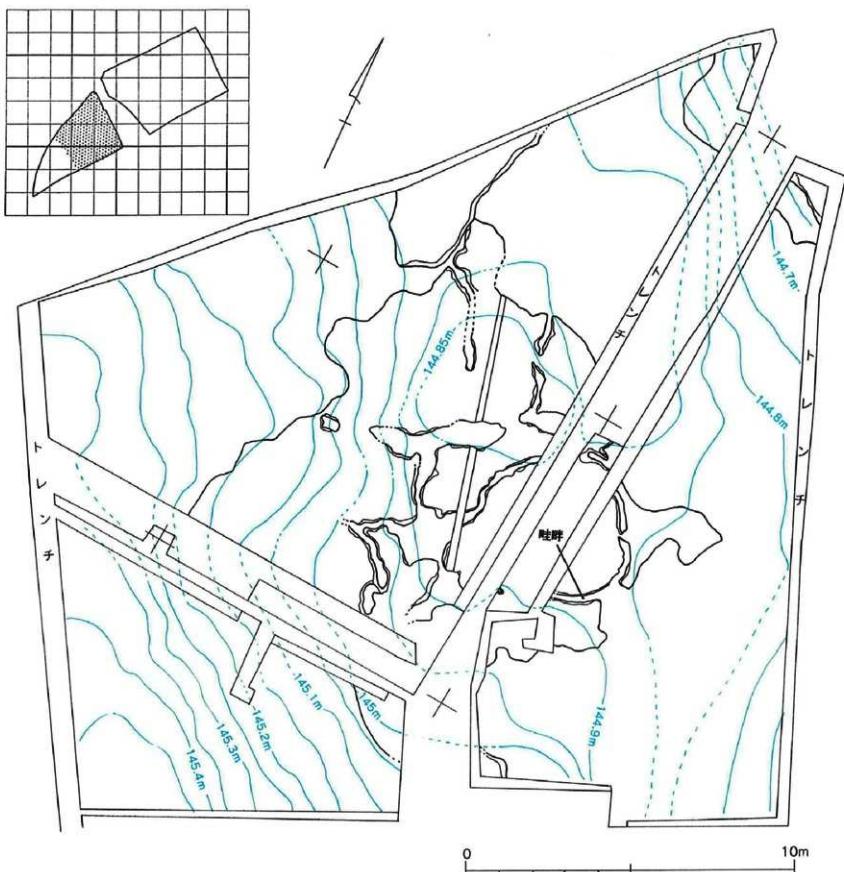
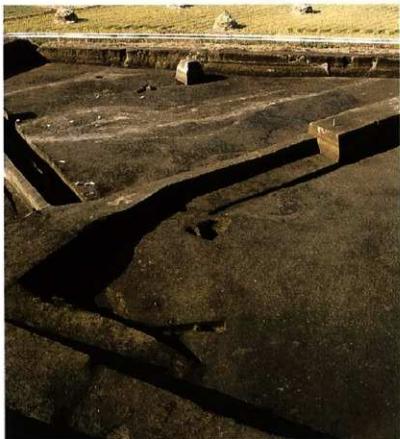


図9 繩文時代 晩期後半の水田跡平面図

遺跡の基本層序について、図に3地点の柱状模式図を示した。J-4区が西区で、H-8区とH-10区が東区である。先に触れたように、調査区域内では霧島御池軽石層まで到達することができず、東区では東水田層の下位には分解されていないヨシ属の葉片を多く含む泥炭質の黒色粘質土、灰白色粘質土、さらに霧島御池軽石の2次堆積を含む砂層の順に堆積物を確認することができた。一方、西区では水田層の下位に軽石（霧島御池軽石や姶良入戸火碎流に含まれる複数時期のものが混在している）混じりの砂層が厚く堆積しており、その下に泥炭質の黒色粘質土が認められた。当該地は霧島御池軽石堆積以前の旧河道の縁にあたっているものと推定され、西区にはシラス台地の裾から軽石混じりの砂が幾度となく流れ込んでくる環境であったと推察される。6b層（弥生時代後期末）よりも下位の土層について東区と西区の各層を整合させることができ難を極めたのは、上記のような堆積環境の違いによると考えられる。次に時期を言及できる水田層について上から順に述べる。1層（灰褐色土）は昭和30年代後半の盛土を含む現代の耕作土である。2層（褐灰色土）は近世の水田層で、3層（灰黄褐色土）から5a・5b層（黒褐色土）は中世の水田層である。5c層（灰黄褐色土）は古代の水田層である。6b層（暗灰黄色土）は弥生時代後期末、6e層は弥生時代中期後半の水田層である。8a層（黒色土）は弥生時代前期後半の水田層で、9c層（黒色土）は縄文時代晚期後半の水田層である。なお、4層は桜島文明軽石（15世紀後半）にあたる。

なお、当遺跡の水田層は粘質土やシルト土というよりも全体的に砂質に近いシルト質（ザラツキ感のある）の堆積物が中心となる。また、基本的に径数mm前後の軽石粒をまんべんなく含んでいるが、これらの軽石には白色を呈し纖維束質のもの（姶良入戸火碎流起源）と浅黄色を呈しスポンジ状のもの（霧島御池軽石）の2者が混在しており、シラス台地の崩落や洪水などによって混入したものと考えられる。



22. 縄文時代晚期後半水田跡上面確認状況



23. 縄文時代晚期後半水田跡（真上から）

2) 縄文時代晚期後半

縄文時代晚期後半の水田層（9c層）は、西区西半分のより高く傾斜がきつくところと東区東半分のより低い低位面には認められず、傾斜がゆるくテラス状になった場所を中心に堆積している。中でも西区では、部分的に洪水砂で覆われていたために、畦畔で区画された状態を比較的良好にとらえることができた。

畦畔の幅は15~30cmで、残存する高さは約3~4cm程度である。水田区画の状態をみると、くずれた隅丸方形ないし梢円形をした水田区画を中心として、それを取り囲むように狭く不整形な区画がいくつか認められた。つまり整然と区画されているのではなく、自然地形に合わせて作られたものと考えられる。



24. 9c層を除去した状態



25. 縄文時代晚期後半の水田跡近景（南から）



26. 縄文時代晚期後半の畦畔断面



27. 縄文時代晚期後半の畦畔



28. 刻目突帝文土器出土状況



29. 縄文時代晚期後半の土器と石器

この畦畔によって区画された場所では、9c層が水分を含み粘質であるが、より西側の傾斜がきつくなる斜面ではやや粘質が弱くなっていた。9c層と部分的な堆積をみた9b層最下部からは、縄文時代後半の土器片数点（深鉢形・浅鉢形など）と石製土壙具の破片1点が出土した。さらに、プラント・オバール分析によって、同層からは多量のヨシ属とイネ（1g中平均約2000個）が検出された。

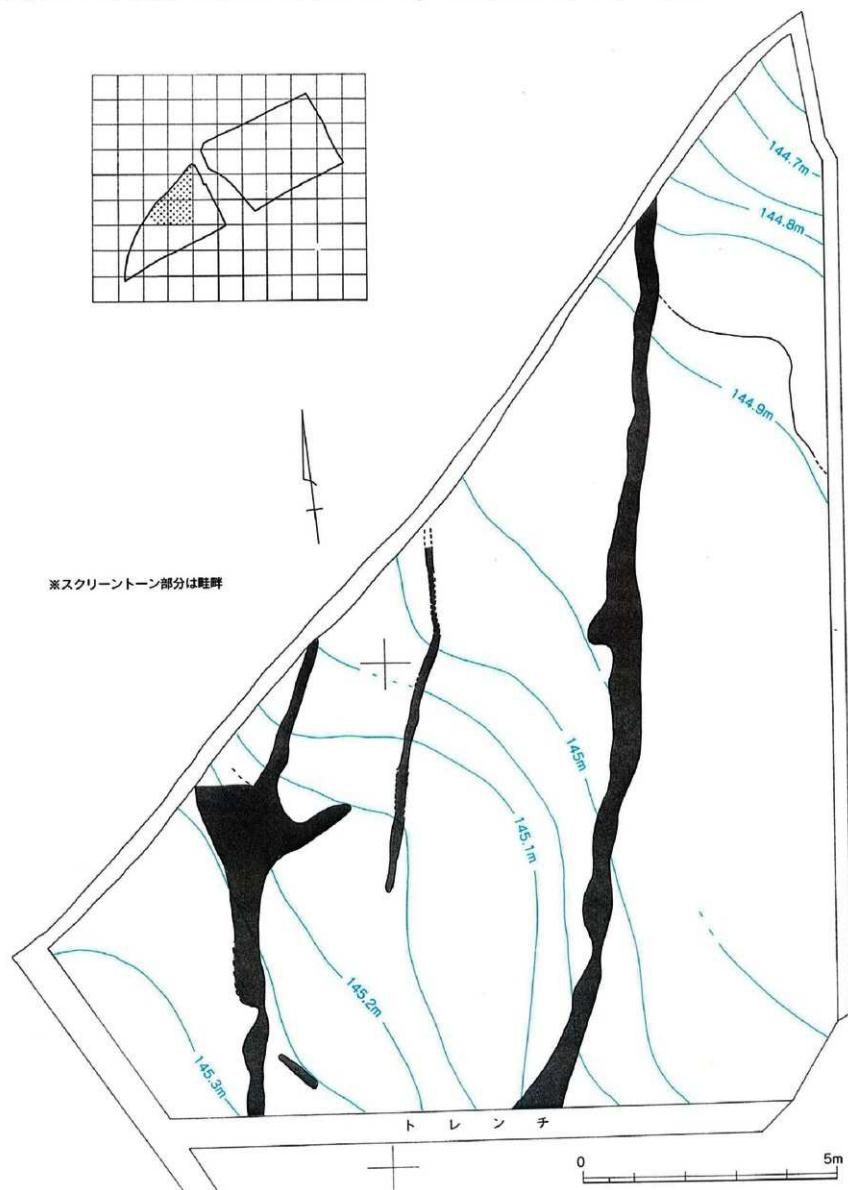


図10 弥生時代前期後半の水田跡平面図



30. 自然流路完掘状況（南から）



31. 自然流路断面

また、水田区画が確認された範囲の西側では、溝状遺構が数条確認されたが、土層断面を観察した結果、これらは 9c 層を切っており、溝内にはシラス台地側から供給されたとみられる軽石（入戸火碎流に含まれる軽石と霧島御池軽石の混在） majiri の砂が堆積している。水田が機能していた時期または水田廃絶後におきた洪水によって形成された自然流路と考えられる。

3) 弥生時代前期後半

弥生時代前期後半の水田層である 8a 層は、東区西半分と西区東半分に認められたが、西区においては、縄文時代晩期後半の水田層の上に洪水によって堆積した砂層を掘り込んで耕作されたものと推察された。畦畔の部分は帯状に砂が掘り残されており（断面はカマボコ状に盛り上がっており）、それによって、部分的に水田区画を把握することができた。また、8a 層からは弥生時代前期後半の土器が出土している。この水田層の上からはおそらくこの時期のものと考えられるローリングを受けた石包丁の欠損品も出土している。

4) 弥生時代中期後半

弥生時代中期後半の水田層である 6e 層は調査区東側の恒常に水が湧く低位面にも広がっていたが、そこでは木製品、丸杭などがまとまって見つかった。そのうち、身の部分が完全な形で見つかった組み合わせ式木製品（イスノキの板目取り材）は、長さ 44cm・幅 11.5cm・厚さ 1.5cm のなで肩タイプで、柄と



32. 弥生時代前期後半の水田跡（西から）



33. 弥生時代前期後半の土器と石包丁

結びつけるための楕円形の穴が2つあいている。着柄部の先端は二叉状に加工されている。刃部に明瞭な加工痕がみられることと水田跡から出土したことにより、農具（耕起具）と推定される。ちなみに、これと組み合わさる柄は見つかっていない。その他、田下駄と推察される板状木製品2点（クリ材）が重なり合って出土している。いずれも遺存状態が悪いために取り上げ時に原形は失われたものの、縦約50cm・横約14cm・厚さ1cm程度と思われ、数ヶ所の穿孔が認められる。なお、丸杭は立った状態ではなく、いずれも横たわった状態で検出された。また、6e層からは少數の土器片や石鏃（1点のみ）、石製土掘具の破片も出土している。

5) 弥生時代後期末

弥生時代後期末の水田層（6b層）は調査区域のほぼ全域で認められた。特に東区では整然とした水田区画を確認することができた。しかし、同じ東区内でも北側と南側では水田区画の形状が異なっており、

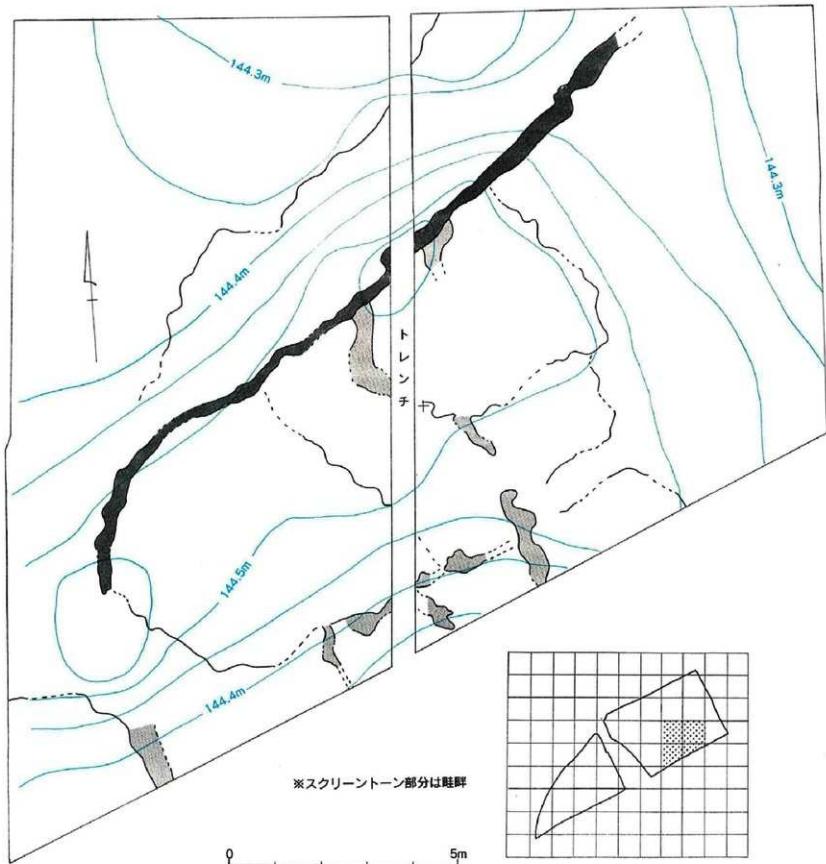


図11 弥生時代中期後半の水田跡平面図



34. 弥生時代中期後半の水田跡（南西から）



35. 弥生時代中期後半の畦畔断面



36. 板状木製品（田下駄？）出土状況



37. 組み合せ式木製品 出土状況

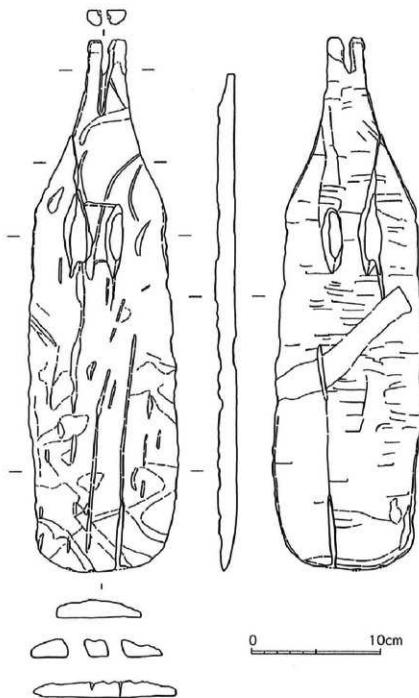


図12. 組み合せ式木製品 実測図



38. 組み合せ式木製品



39. 同上 着柄部と刃部の拡大

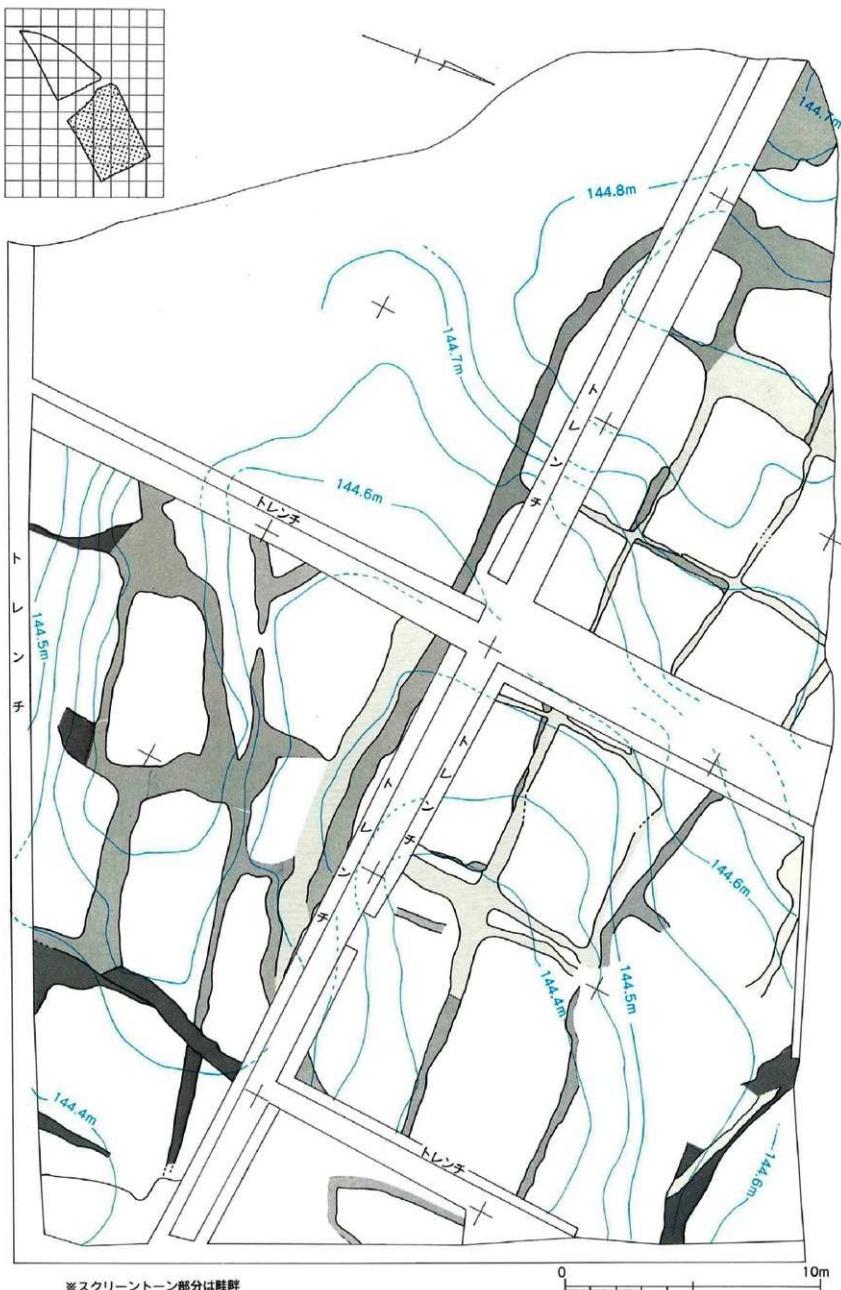


図13 弥生時代後期末水田跡平面図



40. 弥生時代後期末水田跡（東区を南東から）



41. 弥生時代後期末水田跡（東区東側を南から）



42. 弥生時代後期末水田跡（東区北側を北から）



43. 同左



44. 弥生時代後期末の畦畔断面



45. 手づくね土器出土状況

比較的標高が高く平坦な北側では、規格性のある長方形の水田が並んでいるが、微妙な地形の起伏がみられる南側では三角形状や台形形状の区画が認められ、北側に比べると規則性がない。東区北側で確認できた水田区画は南北約4m×東西約8m（約32m²）を測り、畦畔は、幅約40cm・高さ約10cmである。なお、6a層から6c層までは、かなり似通った層相を呈しているが、6a層と6b層、6b層と6c層の間には部分的に薄い砂層を挟んでいるために分層が可能であった。さらに各層の畦畔を平面と断面で観察すると、わずかずつずれは認められるものの、おおむね重なり合っており、おおまかな区画に変更はなかったと考えられる。したがって、6a層から6c層までの各層にそれほどの時期差がなかったことと、小規模な洪

水によって砂に覆われながらも、小畦畔や水田区画が維持されていった状況をうかがうことができる。なお、6b層からは少量ではあるが、完形の手づくり土器や壺形土器・高壺形土器の破片が出土している。

6) 中世

中世の水田層は調査区域のほぼ全域で確認することができた。

5b層は鎌倉時代の水田層であり、5c層の上面で部分的ながら水田区画をとらえることができた。西区のK-4区付近では、5a層の直下の5b層上面に砂の入った小ピットが多数検出された。小ピットの平面形はU字形、楕円形、円形などがあり、U字形のもの（縦約13cm・横約11cm）は南北方向に同じ方向を向いて規則的に並んでいた。また、砂を除去すると枝分かれした部分の先端が深くなっているため、牛の足跡と考えられる。

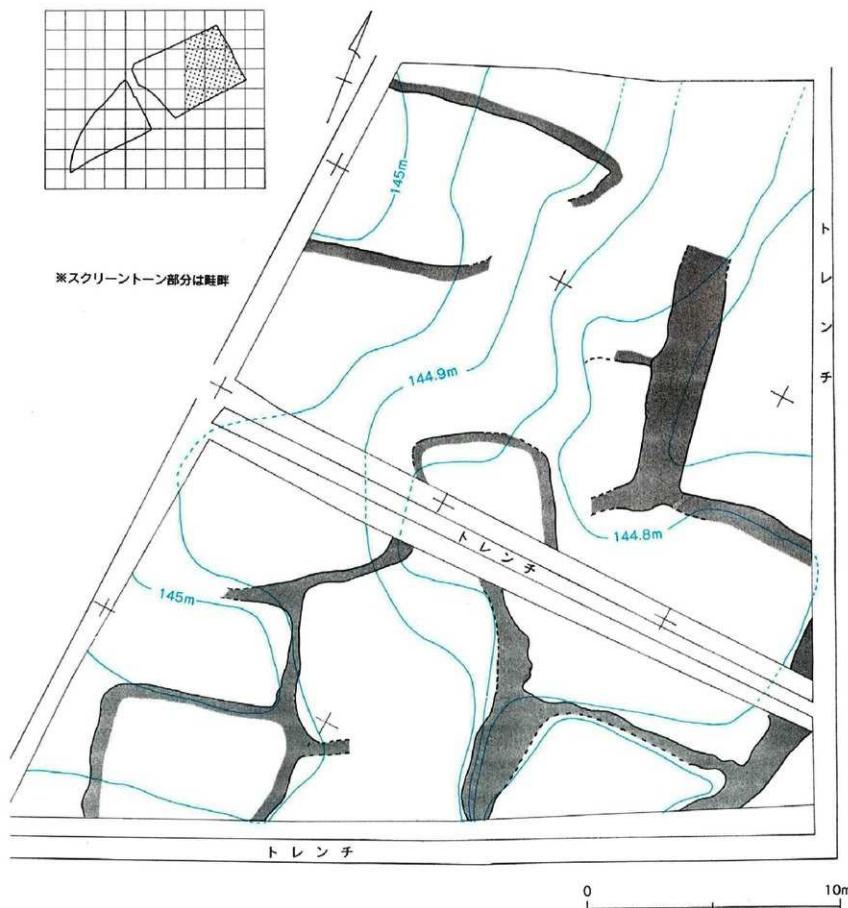


図14 中世(鎌倉時代)水田跡平面図



46. 中世（鎌倉時代）水田跡（南から）



47. 中世土器出土状況



49. 牛の足跡



48. 牛の足跡検出状況

調査区域のはば全域に 15 世紀後半の桜島起源の文明軽石層（4 層）が約 10~15cm の厚さで堆積しているが、この軽石層の中には下層の 5a 層のブロックや軽石の上部に堆積する細粒火山砂のブロックが混入しており、降下後に攪乱を受けたものと思われる。また、軽石を除去すると、4 層下面に激しい凹凸が認められるが、それらは鉢・鍬による耕起痕と考えられる。4 層上面では軽石層が一面に広がる中に、灰黄褐色土（3 層）が帯状ないし溝状に入って区画を形成していた。この溝状構造は 1 条、もしくは 2 条平行して掘られており、盛り上げ畦畔を作るときに畦畔の両側を掘りこんだ跡と推察される。軽石が降下したのちに、復旧のために第 4 層を掘りこんで、新たに区画を作り出したと考えられる。東区中央で全容を確認できた区画は南北約 15m × 東西約 11m（約 165 m²）を測る。

桜島文明軽石直下層である 5a 層の上面は、その時期の水田跡がそのままバックされているのではなく、上記のように、軽石降下後の復旧によってかなり攪乱されていた。ただし、東区においてほんの一部であるが、攪乱を受けていない 1 次堆積の状態の桜島文明軽石層が認められた。その部分については降灰直前の水田面の状態を示していると考えられる。その直下の水田面には凹凸が認められず、おおむね水平であった。その表面について、プラント・オパール分析を試みたところ他の資料と比べてイネの段階と考えられるイネのプラント・オパールが比較的多く検出され、田植え直後の状態であると推察された。

なお、5a 層と 5b 層からはプラント・オパール分析によって、イネだけでなくムギも検出された。



50. 桜島文明軽石上面の水田区画検出状況



51. 桜島文明軽石の断面



52. 桜島文明軽石除去後の状態（西区）



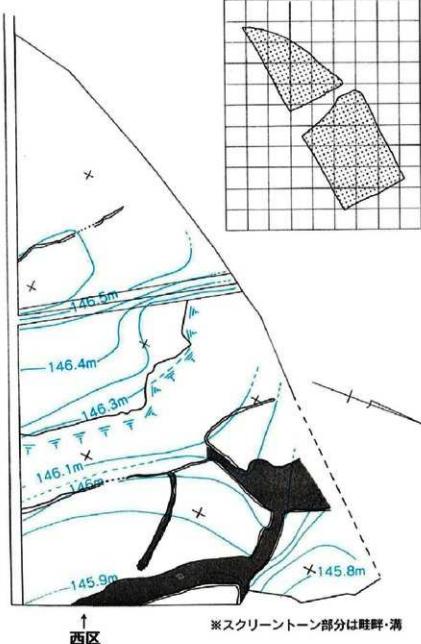
53. 桜島文明軽石除去後の状態（東区）



54. 水田区画の断面



55. 桜島文明軽石直下の状況（平坦な部分と凹凸が著しい部分）



※スクリーントーン部分は畦畔・溝

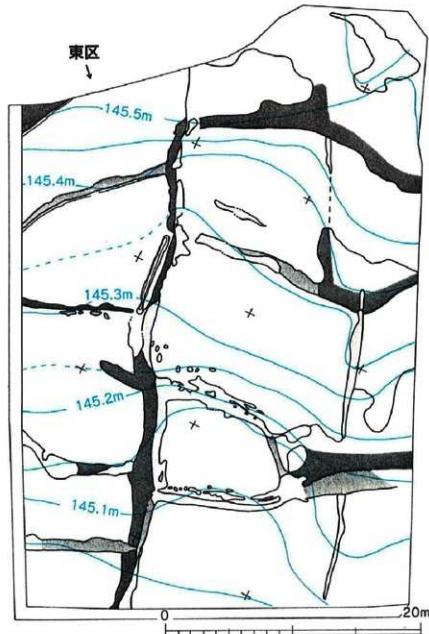


図15 中世(桜島文明軽石上面)水田跡平面図

第2章 まとめ

1) 馬渡遺跡について

馬渡遺跡の第2次調査で検出された平安時代の遺構群と平成11年度に実施した第1次調査の結果とをあわせて考慮した結果、自然地形の窪地や溝状遺構によって区画された平安時代中期（9世紀後半）の居宅跡を推定することができた。内部施設としては、掘立柱建物跡を中心に竪穴状遺構や土坑などの遺構が検出された。中でも、掘立柱建物跡2の身舎の規模は梁間2間（約4.5m）・桁行3間（約6.8m）の四面に庇が付くもので、居宅跡の中心的な建物跡であると推定される。南側の窪地へ至る緩傾斜面からは土師器と須恵器が多量に出土した。さらに窪地の中に堆積した水分を多く含む泥炭質土層からは多様な木製品も出土している。また、その窪地内では墨書き土器も出土しており、祭祀的な意味合いが看取される。この居宅跡の位置付けと評価については、敷地面積（推定面積：約6000m²）、そして掘立柱建物跡の規模と配置、さらに石鈎（丸柄）の出土から、郷長クラスなど下級官人クラスの居宅跡ではないかと推察される。また、越州窯系青磁や近畿・東海系の陶器（緑釉陶器・灰釉陶器）が出土していることから、駅や官道などの交通路に關係した遺跡ではないかとも考えられ（小田富士雄氏・木本雅康氏教示）、歴史地理学による分析を含めて考察していく必要もある。ちなみに、遺跡の東側にある台地上には、掘立柱建物跡が検出され、墨書き土器・越州窯系青磁が出土した中尾山・馬渡遺跡があり、その隣接地の江内谷遺跡でも平安時代の土師器・須恵器・木製品がまとまって出土しており（調査中）、横市川流域一带に平安時代の遺跡が集中するという現象が認められる。ところで、平成11年度に調査された都城市金田町の大島畠田遺跡でも平安時代中期の居宅跡が見つかっているが、当遺跡に比べ、建物跡の規模がはるかに大きく、出土遺物についても青磁・白磁・緑釉陶器などが豊富に出土している（谷口武範氏・大盛祐子氏教示）。今後、両遺跡の細部について比較・検討すれば、該期における遺跡（居宅跡）の類型化が可能となろう。

2) 坂元A遺跡について

坂元A遺跡では、縄文時代後半・弥生時代・中世にかけての水田跡を検出した。同じ遺跡の中において水田の移り変わりを見ることができただけでなく、当地域における水田稲作の普及と展開を知る上で貴重なデータを得ることができた。弥生時代中期の組み合わせ式の木製品については、刃部の形状と水田跡からの出土状況により、農具（耕起具）であると推定した。これが直伸鋤であれば、類例は鹿児島県、長崎県、島根県、滋賀県などで見つかっているが、北部九州で出土している組み合わせ鋤とはかなり異なっている（山口謙治氏・山田昌久氏教示）。その機能と系譜を含め検討を要する資料である。最下層の水田層である9c層は他の層との層位関係や出土土器から、縄文時代後半（夜臼式I式土器・夜臼式土器古段階・山ノ寺B地点の山ノ寺式土器）段階に位置付けられる。しかし、水田区画の平面形が不整形で一区画の面積が狭い点、推定される水田域の面積が狭い（数百m²程度か？）点、そして、用排水路や堰などの確実な水利施設が認められない点などの特徴を持つことから、地形条件や土壤環境に適応した地下水型の水田ではないかと想定される（小田富士雄氏・田崎博之氏教示）。また、同層におけるイネのプラント・オバール検出密度は比較的低い数値であるが、その要因としては、稲作の期間が短かったことや生産性が低かったことなどが考えられる（杉山真二氏教示）。これまで発見されている北部九州の同時期の水田跡（例えば、佐賀県菜畑遺跡・福岡県福岡市板付遺跡・野多目遺跡など）は、水利施設を完備し、整然と区画されているのに対し、当遺跡の水田跡はかなり異なる構造や特徴をもっていることが指摘できる。ともかく、日本列島における水田稲作のはじまりに関して重要な意味合いをもつ資料であり、本報告へ向けて十分な検討を進めていきたい。

報告書抄録

書名	よこいらく いせき ぐん まわたりいせき 横市地区遺跡群 馬渡遺跡(第2次調査)・坂元A遺跡					
副書名	県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う遺跡の発掘調査概要報告書					
巻次						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第55集					
編著者名	桑畠光博・原田亜紀子					
編集機関	宮崎県都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号					
発行年月日	2001年3月30日					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
まわり 馬渡遺跡 (第2次調査)	みやざきけん 宮崎県 みやこのじゅうし 都城市 みのばらちょう 蓑原町 あざ まわり 字 馬渡	31° 44' 11"	131° 01' 10"	2000年4月18日 ～ 2000年12月29日	5400 m ²	農業基盤整備 事業 (県営は場整備 事業)
さかもと 坂元A遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやこのじゅうし 都城市 みのばらちょう 南横市町 あざ さかもと 字 坂元	31° 44' 19"	131° 01' 32"	2000年4月24日 ～ 2001年3月19日	2800 m ²	
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
馬渡遺跡 (第2次調査)	居宅跡・ 集落跡	平安時代 中世	堀立柱建物跡 竪穴状遺構 土坑 溝状遺構 ピット群	土師器 須恵器 墨書き器 綠釉陶器 灰釉陶器 越州窯系青磁 石斧(九柄) 木製品	第1次調査の成 果とをあわせて 考慮した結果、 平安時代中期の 居宅跡というこ とが判明。	
坂元A遺跡	水田跡	縄文時代晚期 弥生時代前期 弥生時代中期 弥生時代後期 中世	水田遺構	土器 石器 木製品 陶磁器 古錢	国内最古級の水 田跡を検出した 他、弥生時代～ 中世にかけての 水田跡も確認さ れた。	

都城市文化財調査報告書第55集

横市地区遺跡群

馬渡遺跡（第2次調査）・坂元A遺跡

県営相い手育成基盤整備事業横市地区に伴う遺跡の発掘調査概要報告書

2001年3月

編 集 宮崎県都城市教育委員会
発 行 〒885-8555 宮崎県都城市姫城町6街区21号
TEL(0986)23-9547 FAX(0986)24-1989

印 刷 宮崎県印刷工業組合 都城支部
〒885-0024 宮崎県都城市北原町1456の4



横市地区遺跡群（左から坂元A、江内谷、馬渡）遠景